

当院はこの研究に協力しています

研究課題名： 若年女性の侵襲性インフルエンザ菌感染症感染経路推定のための記述疫学研究

研究の目的と方法：

侵襲性インフルエンザ菌感染症 (invasive *Haemophilus influenzae* disease: IHD) は、インフルエンザ菌が通常無菌である部位から感染症の原因菌として検出された感染症で、2013 年 4 月から感染症法に基づく 5 類感染症全数把握対象疾患となっています。インフルエンザ菌は 6 つの血清群に分けられ、そのうちインフルエンザ菌 b 型 (Hib) は侵襲性が高いことが知られていましたが、2013 年にこどもを対象とした Hib ワクチンが定期接種化されて以降、こどもの症例数が減少しています。一方、大人の IHD は Hib 以外のインフルエンザ菌で、とくに無莢膜型 (nontypeable *Haemophilus influenzae* :NTHi) が多く、年齢層別では 70 歳代以降の高齢者、性別では男性が多いことがわかっています。20~40 歳代の若年層でも一定数の IHD 報告があり、この年代では男性よりも女性で多く報告されています。高齢者の IHD では、肺炎などの気道感染症が感染症のきっかけになりますが、若年女性の IHD ではきっかけが高齢者とは異なる可能性があります。さらに、妊婦中は妊娠していない女性と比べて感染するリスクが高く、妊娠早期に感染すると流産や早産に関連することがわかっています。日本でも、出産前の妊婦さんから感染した新生児が死亡した報告があります。

そこで今回、日本における若年女性の IHD の特徴や感染経路を明らかにすることを目的に本研究を計画しました。この結果は若年女性の IHD をよりよく診断し、流産や死産および新生児感染症の予防につなげることができ、社会的意義が大きいと考えられます。研究の成果は学会や学術誌にて発表することがありますが、その際、対象者の氏名等個人が特定できるような情報が公表されることは一切ありません。また、この研究が終了した後、提供いただいた情報は適正な方法で破棄します。

研究の対象者及び対象期間：

2025 年 1 月 1 日以降に感染症法に基づく感染症発生動向調査 (NESID) で IHD として届け出られた 18 歳から 54 歳および、生後 1 カ月未満の新生児。

研究に用いる試料・情報：

特定の個人を識別できない状態になった、侵襲性インフルエンザ菌感染症例の診療情報及び通常の診療の過程で採取された菌株が協力機関から国立感染症研究所に提供されます。

同意撤回の申し出：

受診した医療機関で、主治医または担当医に、提供しない情報・試料をお申し出ください。当該医療機関は、対象者から研究への参加を希望しない旨の申し出があった際は、下記まで連絡をお願い致します。

研究組織：

研究全体の管理責任者 国立感染症研究所

国立感染症研究所応用疫学研究センター・センター長

砂川富正

主任研究者 国立感染症研究所

応用疫学研究センター・主任研究員

加藤 博史

研究員 国立感染症研究所

澤 友歌

TEL: 03-5285-1111 FAX: 03-5285-1150

(応対可能時間：平日 9 時～17 時)